

中野拓哉作 **先生になりたい**

<前編>

(会社の雑音)

社員A ただいま、帰りました。

課長 おう、お疲れさん。…で、どうだった、伍代商事は。契約取れたか？

A すみません。ダメでした。また明日行ってきます。

課長 そうか。やっぱりダメか。工藤の方は？

工藤雄介 すみません。おれもダメでした。来週もう一度行ってみます。

課長 来週って。明日はダメか？

雄介 …明日は大学、一限からあるもので…

課長 そうだったな。しかしなあ、工藤。…大学の方は何とかならんかねえー。何度か休んだって大丈夫なんだろう？ 少しは会社のことも考えてもらわなくちゃ…

雄介 はあー…すみません。でも明日の授業は休むとまずいもので…。別に会社のことを軽く見ているつもりはないんですけど。その代わり今度の土日も出勤しますから。

課長 分かった。

雄介 それじゃ、今日も授業なんでお先に失礼いたします。

課長 そうか。お疲れさん。

ナレーション おれは工藤雄介。現在 26 歳で、会社員。高校を卒業してからすぐ今の会社に就職した。大学に行きたかったのだが、おれが高校の時、おやじが事業半ばにし事故で死んでしまい、おれとおふくろに残されたのは多額の借金だけだった。仕方なく働き出したが、おれにはどうしてもあきらめられない小さいころからの夢があった。それは先生になることで、24 の時に一大決心をして夜間の大学の教育学部を受験し、幸いにも合格して、昼働きながら夜は大学に通っているのだ。

武田 仁 こんばんは。工藤さん。く・ど・う・さん？

雄介 あ、あー…お、おう仁か、どうした？

仁 どうしたじゃないっすよ。もう授業終わってますよ。疲れがたまってるんじゃないっすか。最近ずっと寝てばっかで前期のテスト、ヤバいんじゃないですか。

雄介 ああーそうだな。

仁 本当にどうしちゃったんすか。元気ないですね。はい、これ。今日のノート。返すのは来週でいいですから。

雄介 おう、悪いな。…なあ仁これから夕飯付き合えよ。ノートの埋め合わせにおごるから。

ナレーション 彼は武田仁。大学に入ってすぐ知り合った、おもしろいというか、いまだき律儀なやつだ。現役で入学したから年は6つも下なのだが、もう1年以上付き合っている学生仲間なのに、いまだに敬語を使ってる。でもこいつといると、どこかほっとする。何て言うか、“包容力”ってやつだ。なぜだか知らないが、おれのこと気遣ってくれて、ほかに親しいやつもないおれには、年下ながら頼もしい存在だ。

仁 ごちそうさんでした。

雄介 おう。たまにはおごらなきゃな。ノートもしょっちゅう借りるし。…はあー。

仁 どうしちゃったんですか、ため息なんかついちゃって。

雄介 実はまた今日も会社で上司に嫌味言われちゃってさ。まあ気にしなきゃいいんだけどね。死んだおやじの借金もまだまだあるし、学費だって毎回ぎりぎりまで待ってもらってやっと払えてる状態だし。考えちゃうんだよ。おれは本当に先生になんてなりたいたいのか、このまま大学に通ってても物になるのか…なあんてね。

仁 ダメですよ。大学やめちゃ。やめたって何も始まらないじゃないですか。僕も先生になれるかどうか分からないけど…。実は僕、小学生の時から教会学校に通ってて、そこの先生に影響されて僕も学校の先生になろうって思ったんです。両親がクリスチャンで、これでもたまには礼拝に行ってるんですよ。

雄介 何だ、偶然だな。おれも教会学校に行ってたんだ。小学4年生ごろまでかな。おれの時も、すてきな先生がいてさ。その先生を見て、教師になりたいと思ったんだ。

仁 へえ、そうだったんですか。

ナレーション その日、家に帰ったのは12時近かった。

雄介 ただいま…。まだ帰ってないかあ…。

ナレーション おふくろの帰りはいつも真夜中、しかもここ2、3か月は酔っぱらって帰ってくるのが常だった。その日も午前2時過ぎ、おれが仁のノートを写し終えた時に帰ってきた。

母 ただいまあー…はあー、ねえー雄ちゃん、水ちょうだい。

雄介 何だよ、また酔っ払って。今何時だと思ってんだよ。大丈夫？ ほら、そんな所に寝ちゃったら風邪ひくだろ。しっかり立って。はい、水。

母 ありがと。雄ちゃん。(水を飲む。)ふうー。今日も店のお客さんに誘われて断り切れなくて、別のお店に付き合わされちゃったあー。)

雄介 ったく。

ナレーション おやじが死んでからすぐ、おふくろもパートで働き出したが月々の返済に付いていけず、結局今のようなお金のよい夜のスナックの仕事で何とかやっていけるようになった。でも今はおれの給料も少しは良くなったこともあって、おれ

としては少くも生活がきつても、おふくろには今の仕事をやめてほしかった。しかしそんなことを話すチャンスもなく毎日が過ぎていった。学校も休みに入り、しばらくの間、会社と家の往復だけの日々が続いた。そんなある日、珍しく課長の機嫌が良くて、おれは定時に会社を出ることができた。その帰り道…。

杉山涼子 あれえー！ もしかして雄・介・君？
雄介 は、はい。そうです、けど…？
涼子 そうよねえ。あら久しぶりねえー。こんなに立派になっちゃって。もう 15、6 年たつわよねえー、会ってないの。
雄介 え？ あ、ああー。杉山先生ですか？
涼子 そうよ。雄介君の、かつての“あこがれの君”よ。
ナレーション 杉山涼子先生。それは、小学校のころ通っていた、教会学校の先生だった。教会の中では一番優しくおもしろい先生で何でも話せたし、どんな相談にも答えてくれた。あのころは両親よりたくさん話してたかも知れない。確か小学校の教師をしていた。
雄介 本当、久しぶりです。懐かしいなあー。
涼子 ごめんね、今日これから人と会わなきゃいけないから急ぐけど、必ず近いうちに教会に遊びにいらっしやいよ。それじゃあ。
雄介 は、はい。
ナレーション おれは懐かしさでいっぱいになりながら家に着いた。
(ドアを閉める音)
母 あら、お帰り。今日は早いのね。
雄介 母さんいたの。あれ、今日お店は？ まだ行かないの？
母 このところ新しい子が入ったし景気も悪いから、マスターが休んでくれて。ああーあ。
雄介 なあー。やめちゃえよ、そんな仕事。普通のパートかなんかでも、頑張ればやっつけていけるよ。
母 ふっ。バカなこと言わないでよ。もっともお金は必要なのよ。何としても父さんの借金は返さなきゃいけないし。ねえ、実は相談なんだけど、自分でお店始めようかなって思ってるのよ。そうならば借金なんてすぐ返せちゃうし。でもそれには少しまとまったお金が必要なのよね。
雄介 そんなお金がどこにあるんだよ！ なあ、そんなことより地道にやろう。
母 何言ってるのよ。今までどんなに惨めな生活してきたか、あんただって知ってるでしょ。あんたを大学にも行かせてあげられなかったし…。
雄介 今こうやって通ってるじゃないか。それより、もっとまともな仕事をしてくれよ。おれだって頑張るからさ。

母 いいわよ。もうあんたには頼まない!

ナレーション その日は結局話が物別れになってしまった。その後、母も金策の話は持ち出さなかったの、あきらめたのかと思い、いつしか忘れかけていたが、事件は大学の後期の授業が始まって2か月後に起こった。夜、大学に行くところ。

仁 工藤さーん。工藤さーん。…はあ、はあ、はあー。

雄介 どうした、仁。そんなに慌てて。

仁 はあー。どうしたじゃないっすよ。工藤さん学校やめちゃうんですか!?

雄介 はあー? いいや、やめないよ。でも、何で?

仁 だって、掲示板に工藤さんの名前が…。

雄介 掲示板で? …どういうことなんだ?

仁 工藤さん、まだ見てないんですか。除籍名簿が張り出してあって、その中に…。

雄介 除籍? 除籍って、な、何でそんな。まさか…。

仁 とにかく事務室に行って確かめてみた方が。僕も一緒に行きますよ。何かの間違いってこともあるし。

ナレーション おれは飛ぶように事務室に急いだ。

事務員 ええーと。工藤、工藤っと。工藤雄介君ですね。間違いじゃありませんよ。

雄介 間違いじゃないって、どういうことですか。

事務員 どういうことと言われましても、後期の授業料が未払いになってますからねえー。

雄介(モノ) じゅ、授業料が、未払い。そ、そんなあ。

ナレーション 一瞬、信じられなかった。今まで苦しい中を切り詰めて、おれはボーナスの中から授業料分を預金してきた。そして、自動引き落としで、きちんと支払ってきたのだ。一体何が起こったのだろう。その時、おれは 2 か月前の母との言い争いを思い出した。

母(エコー) 実は相談なんだけど、少しまとまったお金が必要なのよ

雄介(エコー) そんなお金、どこにあんだよ!

雄介(モノ) まさか…そ、そんな…

ナレーション おれの頭の中を、嫌な予感が走った。

<後編>

ナレーション おれの名前は工藤雄介。死んだおやじの借金のために高校を出てすぐ社会に出て働き出して9年目の会社員。先生になりたいという小さいころからの夢のために苦しい生活ながらも夜間の大学に通っている。そんなある日、大学で突然除籍を言い渡された。

雄介 そ、そんなはずはないんですけど。確かに後期分は引き落とされてるは

ずです。

事務員　　いいえ、引き落とし不能になっています。そちらの手続きの間違いじゃありませんか。もう一度確認してみてくださいよ。こちらとしても事情によっては学生課の方で相談にも乗りますよ。それに今月中に直接振り込んでもらうかたちをとれば大丈夫ですから。

雄介　　今月中、ですか。分かりました…。

仁　　良かったですね。いきなり除籍つうのはないですよ。でも、どうして…。

雄介　　ごめん。悪いけど今日の授業のノートと出席カード、よろしく頼む。ちょっと気になる事があるから…。

仁　　は、はい。いいですけど。

ナレーション　　気になる事とは2、3か月前おふくろが今勤めているお店をやめ、自分でスナックを始めたいと言っていたことだった。そんなお金はどこにもなく、その時は単なる思いつきで言ったのだらうと気にも留めていなかったが、今となってはその時のおふくろのことが妙に気になった。学校を飛び出し急いでおふくろが勤めている店に行ったがここ2、3日来ていないと言われ、仕方なくおれは家に帰った。

(ドアの開閉音)

母　　(泣いている)

雄介　　母さん、どうしたの？…どうしたんだよ。

母　　ごめんね。ごめんね。雄介、許してちょうだい。(泣き崩れる)

雄介　　泣いてたって分かんないよ。何があったんだよ。

ナレーション　　しばらく泣いていたおふくろは、やがて気を取り直したように話し出した。

母　　覚えてる？ 前にあんたに話した事。自分で店を持ちたいって言った事。あれ本気だったのよ。でもあんたの言うとおりに家にはそんなお金、どこにもありやしない。だから忘れようとしてたの。そしたらある日、店のお客で相談に乗ってくれるっていう人が現れたのよ。とっても親切にしてくれて良さそうな人で、わたしが50万出せば、後はその人が援助して、お店を始められるからやってみないかって言うの。それで、あちこち駆けずり回ってお金借りようとしたんだけど、何せ父さんの借金があるでしょう。思うように集まらなくて、わたしの物、質に入れてかき集めても、あと50万足りない。そんな時、あんたの銀行口座の事を思い出して…。学費だって分かっていたんだけど2、3か月で返せば大丈夫だろうと思って、つい黙って下ろしちゃったのよ。

雄介　　それで引き落とせなかったのか。それで、どうしたの？

母　　そのお金を相手の男に渡してお願いしておいたんだけど、それっきり。

雄介　　それっきりって、それどういう事？

母　　だまされたのよ…もちろんそいつを必死に探したんだけど…。ごめんなさい。

まさかこんな事になるなんて…。

雄介　　ちょ、ちょっと待てよ。何でそんなこと今まで黙ってたんだよ。やだよ。おれ許さないからな。絶対、許さないからな!!

ナレーション　今更怒りをぶつけたところでどうしようもない事は分かっていたが、自分を抑えることができなかった。差し当たり、何としても 50 万都合しなければならぬ。さもないと、おれの教師への夢は消えてしまうのだ。翌朝会社に着くと、おれは意を決して課長の前に立った。

雄介　　その、実は、給料を前借りしたいんですけど。

課長　　はあー？ 何を言い出すかと思えば、はっ。つまらない冗談はよせ。それより、やらなきゃならない仕事がいっぱいあるだろ。

ナレーション　その日からおれは、懸命に金策に走った。しかし答えはどこでも同じだった。親せきや知人、友人、サラ金や学生ローンまでもが、残っているおやじの借金の事を口にする、おれは次の言葉を失った。学費納入の期限も迫ってくる。無理と知りつつも、おれは再度学校に頼んでみることにした。

事務員　　そんなこと言われても無理ですよ。

雄介　　もし払えないと、どうなるんですか？

事務員　　そのまましておきますと自動的に除籍になり退学ということになります。ただ手続きさえとれば、今年度1年間は休学ということにして、来年同じ学年に復学するということもできますが。

雄介　　分かりました。もう少し考えて結論出します。

ナレーション　おれがガックリしながら事務室を出ると、バツタリ武田仁に出会った。

仁　　工藤さーん…。今日来てたんですか。心配しちゃいましたよ。工藤さん、ずっと来てなかったから。どうしてたんですか？

雄介　　どうしたらいいんだよ。

仁　　え…！？

雄介　　おれ、学校やめる、かも。

仁　　学校やめるって！？

雄介　　ああ、多分ね…

仁　　あのう、工藤さん。僕と一度教会に行ってみませんか。ほら、いつか話したでしょう。僕がその先生を見て教師になりたいと思った教会学校の先生がいたって。その先生、今も小学校の先生をしながら、日曜日は教会学校で教えてるんだけど、一度工藤さんにも会ってほしいんだ。工藤さんも、普通ってた教会学校の先生を見て、教師になりたいと思ったって言ってたでしょ。

雄介　　ああ。

仁　　工藤さん。生意気なこと言うようだけど、今の工藤さんは中途半端だと思う。会社と勉強の板挟みになって、自分を見失っているような気がする。お金の

ことは僕にはどうにもできないけど、その先生に会って、工藤さんに、もう一度、自分は本当に教師になりたいのかどうか、考えてほしいんですよ。

ナレーション おれは、誘われるままに、仁の通う教会に付いていった。心の中では、今、仁に言われた言葉がガンガン響いていた。

仁 杉山先生。今日は大学の友達を連れてきました。工藤雄介さんです。

涼子・雄介 (同時に) あっあれ？

涼子 雄介君？

雄介 先生、だったんですか？

ナレーション 世の中には、こんなことがあるんだろうか。仁もおれも、その生き方に引かれて教師になろうと思った教会学校の先生とは、杉山涼子先生だったのだ。

涼子 うれしいわ。この間雄介君に会ってから、妙に気になって、こっちから会いに行こうかなと思ってたところなの。あのころ、『僕も杉山先生のような先生になるんだ』なんてうれしいことを言ってたけど、どうしてる？ 先生になれたの？

ナレーション おれは、杉山先生に、これまでのことすべてを話した。杉山先生も、そして仁も、うなずきながら黙って聞いてくれた。不思議なもんだ。聞いてもらっただけで、母への恨みとか、不安とか、鉛のように重かった心が、大分軽くなっていた。

涼子 そうかぁ。いろいろ大変だったのね。でも、お母さんも、よくよくのことだったのよ。きっと心から後悔なさってるわ。

雄介 ええ…。

涼子 あのね、雄介君。神様は時々、わたしたちの本当の気持ちを確かめるために、テストをなさるのよ。それも、とても乗り越えられないような“試練”を通しての、飛び切り難しいテストをね。

雄介 あの、今のおれに起こってることが、その…神様のテストなんですか？

涼子 先生そうだと思う。会社の仕事は、段々要求される責任も重くなってくる。勉強の時間はなかなか取れない。そんな中で、気持ちがグラついてきた。そこへ、このことが起こった。神様はね、君が本当に教師になりたいのか、この試練の中で、もう一度真剣に考えなさい、とおっしゃっているような気がするな。まだ時間あるから、これから2、3日かけて、ほこりかぶってる聖書開いて、お祈りしてごらんなさい。

雄介 お祈り、ですかぁ？

仁 そうですよ、工藤さん。僕も工藤さんのために祈ります。

涼子 神様はね、『わたしを呼び求めよ。そうすれば、わたしはあなたに会う。』とお約束なさってるわ。きっと君にも、答えを与えてくださる。その確信を与えられたら、もう一度ここにいらっしやい。そしたら、お金の方は、先生が貸してあげる。

雄介 ほ、ほんとですか？

涼子 わたしの結婚資金だけど、当分使いそうもないから。

(3人、笑い。)

ナレーション 帰り道、おれは、小さな声で“神様”と言ってみた。本当に久しぶりの祈りだった。そして、“どんなことがあっても先生になるぞ”と、その時、心に決めていた。(ポーズ) 追伸。母をだました男が別件の詐欺で捕まって、大部分のお金が戻ってきたのは、その数日後だった。

(完)